

St. Luke's International University Repository

現象学管見

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): Husserl 作成者: 山本, 俊一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/266

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



現象学管見

山 本 俊 一*

要 旨

現象学を科学の方法論的用具として用いることについて、科学者の立場から批判した。

キーワードズ

現象学 Husserl 哲学 科学

I. はじめに

私はそれまでは現象学という言葉に耳にしたこともなかったが、こちらに来て大学院生や若い研究者たちが日常的に現象学を口にしておられるのを見て、これは大した人たちだ、私などは到底足元にも及ばないと、たじろぐ思いにかられた。ところが、だんだん落ち着いて聞いてみると、どうも米国の一部の看護学教授たちが最近書いた本の大きな影響のあることを知った。そこで私も、おそろおそろこの本を手にして読んでみたが、どうも十分納得できるものではなかった。

そこで、この際思い切って現象学そのものを調べてみようと思ひ立ち、勉強を始めることにした。このことは、みんなに知られずにこっそりやればよかったのであるが、無分別にも公開の場で批判的発言をしばしば行なったため現象学信奉者たちの逆鱗に触れ、とうとう本号に、現象学についての総説を書かなければならない仕儀となった。「雉も鳴かずば打たれまい」という。これは自ら播いた種だから仕方がない。

ただし、ここで私は科学の立場から現象学を批判しようというのではない。まして、現象学に対する哲学的評価を行なうなどとは決して考えていない。ということをお断りしたい。

ここで申し上げようと思うのは、最近現象学が科学の分野に入ってきたが、これに対する科学者としての私

の感想である。

結論を先に申上げると、「もともと現象学と科学は水と油のように互いになじまないものである。だから、このままでは現象学を自分たちの仲間として科学の分野に受け入れることはできない」ということである。以下で、これについての私の意見を述べたい。

II. 哲学における現象学

先ず、現象学が哲学においてどのような地位を占めているのかについて、私の知り得たことを簡単に述べてみたい。

(1) 唯物論と唯心論

哲学の世界では、古代ギリシャ時代から現代に至るまで、あらゆる事象に「物心」あるいは「心身」の両面があるという二元論が支配的な役割を演じてきたが、このうちのどちらに重点を置くかによって、哲学は唯物論と唯心論に二分される。

唯物論と言えば、唯物弁証法を唱えた Marx や Engels を思い浮べるが、近代科学もこのカテゴリーの中に入れてしかるべきものである。

これに対して唯心論は、観念論、形而上学、思弁哲学などの名でも呼ばれ、近代になってからはドイツ哲学がこの分野でリードしてきた。中でも Kant や Hegel はその巨峰とみられている。その系譜から見れば、Husserl は新 Kant 派に属し、ドイツ哲学の主流の中の一人と言える。この点、私は知人のオランダの哲

* 聖路加看護大学教授

学者に意見を求めたところ、その人も Husserl と現象学を高く評価していた。

つまり、現象学は正統的な西洋哲学の一つなので、これを正しく評価するには西洋哲学史の文脈の中で理解しなければならないことになる。

(2) 「現象学の基本問題1910/1911」

最近私は、丸善の洋書部で偶然1冊の Husserl の著書を発見した。これが「現象学の基本問題1910/1911」(Grundprobleme der Phänomenologie 1910/1911)である(以下これを「本書」と呼ぶ)。私は踊る心を押えながらこれを購入し、早速むさぼるように読み始めた。

これは Husserl が1910年から1911年にかけての冬学期に、Göttingen 大学哲学部学生のために講義したノートを集録したものである。

Husserl としては、ここで初めて現象学の名乗りをあげたわけであるが、この新しい学問大系を学生のために平易に説いたのが本書である。そういう意味では、これは私のような初心者にとっては恰好の書である。

なお、本書は1973年すなわち実際の講義から60年後にやっと刊行されているが、これには次のようなエピソードがある。

Husserl はユダヤ人だったので、第二次世界大戦中はナチスによって迫害された。さすがに著名な哲学者だったので強制収容所に送られることはなかったが、晩年は哲学者としての活動が禁止されたばかりでなく、その著書は全部処分される運命にあった。ところが、間一髪のところ危うくベルギーに運び出され難を逃れたという。本書はその時疎開された著作物の一つである。

(3) 現象学に対する哲学界の批判

現象学は哲学の根底を問う重大な挑戦だったので、多くの批判が出される一方、熱心な支持者も少なかった。

Husserl が現象学の第一声をあげた本書の中でも、今後自説に対して提起されるであろう反論を予測し、手回しよくそれに対する弁明を行なっている(本書3章18-22節)。

しかし、それにもかかわらず、その後も現象学についての論争は絶えないし、また最初は現象学に傾倒して Husserl の弟子となった人たちの中にも、Heidegger や Sartre のように後になって意見を異にし、袂を分かった人も少くない。

こうしてみると、現象学の提起した問題は、哲学の領域では、極めて重大なものであると同時に、大きく意見の分かれるところでもあるらしい。

III. 現象学と科学の対立

(1) アインシュタインとタゴール

こういう寓話がある。ある日、ドイツの物理学者アインシュタインとインドの詩人タゴールの二人がそろって夜道を歩いていた。この時アインシュタインがこう言った。

「このきれいな月をご覧なさい。人類が滅亡した後にも、やはり月は同じように昇るでしょう」

するとタゴールが答えた。

「いいえ、人類がいなくなったら、もはやこの美しい月はなくなるでしょう」

この寓話は、アインシュタインの自然科学の立場、タゴールの現象学の立場を象徴しているのだという。

私は必ずしも、これが現象学と科学の違いを的確に表現しているとは考えないのだが、これに基いて若干の考察を加えてみたい。

アインシュタインの言葉を説明するとこういうことになる。

「月は地球という天体に所属する唯一の衛星であるが、両者はともに宇宙空間内に客観的に存在する物体であり、このような天体の運行は宇宙の中において永遠に続くであろう」。

これが自然科学の立場であって、月は客観的な存在で、地球上に人類が生存するか否か、誰かが見ているかどうかということに無関係に地球の周りを運行する。

これに対して、タゴールはこういう考え方をする。

「月が美しい」とは人間がいる限り言えることであって、人類が滅亡すれば「美しい月」は存在しなくなる。土星には14個の小惑星があると言われるが、生物がないので、それは決して美しくはない。

このように分析すれば、二人の言うことはどちらも間違っておらず、ただ両者の立場が大きく異なるだけということになる。以下で、このうちの現象学的見解について、もう少し詳しく考えてみたい。

(2) 現象学者の主張

現象学者はタゴールの発言内容を次のように言い直すであろう。

「暗い夜空に美しく照り輝くあの一つの現象をご覧なさい。自然科学を支持する人びとはあれを満月と呼び、その本態は実存する客観すなわち物体であると言います。

哲学者 Descartes は、これを『延長されたもの』(res extensa)と呼びましたが、これの一般的な特性は延長すること、すなわち空間内に大きさをもってその一部

を占有することにあります。そもそも、月とは物体であって客観的に存在するものであるのか、それとも幻のように実際には存在しないものであるのか、人類の歴史の中では人びとはいろんな考えを出してきました。

しかし現象学では、存在するかしないかについては、結論を保留します。その理由は誤りを犯さないためです。「存在する」にせよ、「存在しない」にせよ、どちらかに自分の結論を下せば、誤りを犯す危険があるから、態度を保留するのです。

実はこれが現象学の基盤となる思想で、現象学的還元 (Phänomenologische Reduktion) と言う。その意味は、後に説明するように、客観に対する「判断停止」(Epoche)、客観の「カッコ入れ」(Einklammern) または客観の「除外」(Ausschaltung) ということである(本書 2章11節)。

次節で、この還元をめぐる問題点を簡単に説明したいと思う。

(3) 現象学的還元をめぐる

Husserlは現象学還元、すなわち自我を現象学的に棚上げするという自説に対して、当然異議が出てくるであろうことを見越して、次のように弁明している(本書 3章19節)。

「自我を棚上げしようとする現象学的還元などということは、到底考えられることではない、という異議が多分あちこちから出されることであろう。勿論、われわれとしては、これに答えなければならない。

ある意味において経験的(日常的)超越を棚上げにする可能性、つまり全自然の存在をカッコに入れるという可能性については、異論の余地はないであろう。これと同じように、経験的自我の存在をカッコに入れることも可能なのである。そして、このことについては、現象学のわく内では何の判断も下さないし、またこれを利用することもしない。

しかし、こう申上げて、なお次のような反論、すなわち意識としての経験的自我と純粹自我は分離不可能であるという意見が出てくるかも知れない。

しかしわれわれは、現在のところ、これについては結論を出していない。ただ、われわれに言えることは、われわれの立場に立って見たことについてだけ、現象学的研究の成果について話すことができるし、また話さなければならないということに尽きる。

物体、人間、空間および時間を含んだ全宇宙をカッコ内に入れた時、つまりこれらが存在しないとした時にだけ、純粹自我とか純粹時間というものが現われてくる。これが現象学である」。

要するに Husserlは、現象学の絶対妥当性を守るた

めに、自論の中の脆弱な部分をここで自らの手で切り離していると言うことができる。

これに対する私の感想は、どうも現象学というもの、現象学的還元という条件の下でのみ成立するもの、ようであるが、そもそも看護とか医療という現場では、病気とか病人を含めた客観の全てをカッコに入れるなどは、初めからできない相談で、現象学はわれわれには縁のないものだということになる。

(4) 科学の場において

今仮りに、現象学の場において現象学者の主張する説が絶対妥当性をもつということを容認するとしても、いったん現象学者が科学の場に立ち入り、何事かを主張する時、そしてそれが科学者の説と対立する時、その判定は、当然のことながら、現象学者の方に不利で、軍配は科学者の方に上がるであろう。

ここで例として、再び月に関する論争を取り上げることにする。

アインシュタインやタゴールの時代には、月が物体であるか虚像であるかの議論には着着がつかなかったので、現象学者は客観としての月の存在をカッコに入れることができた。

でも今は違う。既に人類はロケットに乗って月面に到着し、その実況はテレビで放映され、多くの人はそれを見た。

またその後も、月面で採集された鉱石は博覧会に展示され、みんながそれを手に取って眺めている。

もはや月の存在はカッコに入れる必要はなくなった。月の存在は科学によって証明されたのである。

つまり、科学者は先端技術を用いて有人ロケットを発射し、これが約240万キロメートルの延長(extensione)を飛行した末、月という延長されたものに到達したのである。現象学はこれによって理論的に破産したとしか考えられない。

(5) がんの細胞診

以上、私の述べた説明に対して、月のような物理学的なハードな対象を引き合いに出したのでは、科学の場における勝負は現象学の方に分が悪いことは明らかで、理不尽であると現象学擁護派は反論されるかも知れない。

それでは、われわれの本来の関心事である医学的な事象についてはどうだろうかを具体的な例を挙げて考えてみたい。月などに比べるとこれはずっとソフトだから、現象学の働く余地はあるかも知れない。

さて、ある病理学者が生体材料から作った標本を顕微鏡で検査している場面を想像していただきたい。ここでこの病理学者の意識を分析してみたいのである。

顕微鏡の視野にはいろいろな形をした多数の細胞が現出しているが、彼の関心はもっぱらがん細胞の検出にある。

さてここで、この病理学者を科学の場から現象学の場に移し、彼の意識に対して還元処理を行ったと仮定しよう。

前述のように、現象学的還元とは病理学者から経験的意識を除外して純粹意識だけの状態にすることである。すなわち、教育、情報などによってこれまで経験的に付加されてきた憶見(Doxa)をカッコに入れるのである。

この操作によって顕微鏡をのぞいていた病理学者が、突然、現象学的還元状態になったと仮定した時、いったい彼にどういうことが起こるだろうか。

像想するに、彼の意識の中では、還元前と同様、たくさん細胞が濃淡とりまぜて、いろいろな色調に染まっているのを現象として見るであろうが、還元状態では、どれががん細胞であり、どれががん細胞でないかを区別できなくなっているであろう。と言うのは、彼は学生時代から、病理学講義の時のスライドや教科書の中の図譜によって、がん細胞とはこういうものであるという知識と情報を詰めこまれ、また病理学教室に入ってから、先輩たちから現場で機会ある毎に鑑別方法を教わったので、がんの細胞診ができるまでになったのである。

ところが、もし仮りにこれらの貴重な体験を全く憶見であるとしてカッコに入れてしまうならば、がん細胞を鑑別診断しようという能力ばかりでなく、動機さえも全く消え失せることとなり、直ちに彼はがん専門の病理学者としての資格を失うであろう。つまり病理学という科学は、現象学とは両立できないという結論になる。

(6) 完全主義と不完全主義

ではなぜ現象学は、科学者にとっては理不尽とも見えるこのような要求をつきつけてくるのだろうか。

その理由は、現象学に限らず一般論として哲学者は、どんな些細な過誤をも許さないという完全主義者だからだと思う。これに対して科学者は不完全主義者である。と言うのも、哲学は観念論であるから、還元だろうが何だろうが、どんなことでもできるが、現場をもつ科学者にとっては、それは夢物語でしかない。

再びがん細胞を探す病理学者の例に戻ろう。現実の細胞診では、例えば100回に1回は誤診断によってがん細胞でないものをがん細胞と判定すると仮定しよう。

誤診された患者は、がんでもないのに胃を切り取られ、その上執刀した外科医は自分のお蔭で胃がんが治ったと自慢する。潔癖症の現象学者たちは、こんな

不正に耐えられないのである。

現象学者たちはこう考える。がん細胞診に誤診が避けられない理由は、この診断が憶見によってなされるからである。これを回避する途は一つしかない。それは判断停止である。がん細胞を発見しようという思いはカッコに入れ、純粹意識でもって顕微鏡を無心に見ること、これが現象学であると主張するのである。

このような現象学者の気持は分からぬではないが、現場にある者としては、99人のがん患者を救うためには、がんでもないのに手術をされる患者が一人ぐらいいても仕方がないとあきらめる、これが看護や医療の立場である。

要するに、現象学と看護学は、水と油のように、互いに相容れない異質のパラダイムであると私は申し上げたい。

IV. 現象学から見た自然科学

前章では科学の場に導入された現象学を科学の立場から批判したが、本章では逆に、Husserl自身が現象学の立場から自然科学をどう見ていたかを簡単に紹介したい。

(1) 異質性

本書の冒頭で科学と現象学の絶対的な異質性については、次のようにはっきり述べられている(1章1節)。「われわれが行なおうとしている研究は、自然的な立場とは全く違った立場を要求する。これまでは、この自然的な立場の下で自然科学的な知識や心理学的な知識が獲得されてきた。

しかし、現象学は決して心理学ではない。これは全く新しい次元に置かれるものである。これは心理学とも、時空間的存在にかかわるあらゆる科学とも本質的に違った立場を要求する」。

また本書の巻末でも、結論として両者の立場の相違について、再び次のように明言している(本書6章41節)。

「特に言っておきたいことは、われわれは現象学と自然科学はある種の平行関係にあると考えていることである。両者とも、それぞれ独自のやり方で対象とかわり合う。一つは現象学的立場で事実を取り扱い、もう一つは自然の立場で事実を取り扱うのである」。

以上によって Husserl は、現象学と科学とは本質的に異っていることを繰り返し強調しているとみることができる。

(2) 協力の可能性

ところが、Husserl は現象学と自然科学が異なる立場に立つと結論した後、さらに語を継いで、だからと

言って両者は全く無関係というわけではなく、現象学が自然科学を援助することは可能だと言う(本書 6章 41節)。

「しかし、現象学的経験に基いて、どこまでイデア化を実現してイデアの科学知識を獲得しようとするのか、また、現象学の領域で先験的知識がどのような役割を演ずることになるのかについては、われわれは考えたことはない。

われわれの知る限り、自然に関しては純粹自然科学というものがあり、また自然の先験性ということも、それに付随したものとして幾何学のような先験的な学問分野も存在する。

だが、上記以外に経験的自然科学というものがあるが、これは決して、現実にかかる個々の事例すなわち外的経験としての事実自然の純粹先験性を持ち込もうとするものではない。そのようなことは空しい試みであり、科学的に価値はない。

ただし、先験的な知識というものを経験的知識を獲得するための方法論的用具として役立つものであって、これを用いれば、経験科学のシステムの中に全く新しい何ものかをもちたすことができるであろう」。

つまりここでは、先験的知識というものは、そのまま経験科学の中に持ち込んでは何の役にも立たないが、用具として使用する限りでは、経験科学に対して有用であろうと提案しているのである。

この Husserl の提案に呼応して、一部の科学者が方法論としての現象学を科学の領域に導入しようとしているのが、現在の状況である。

私は以下で、先験的知識を方法論的用具として経験科学に取り入れようとすることも、果して空しい試みではないのかどうかという問題について検討してみたいと思う。

V. 現象学における主観

現象学では客観をカッコに入れるので、主観だけが研究の対象として残る。では、現象学はいったい主観あるいは意識というものをどう見ているのか、私の理解したことを述べてみたい。

(1) 主観の構造

現象学では主観すなわち意識を複合体であるとみなし、独特の還元を行えば、この複合体すなわち日常的意識(あるいは経験)は超越的な(transzendent)意識(あるいは経験)と憶見の二つに分離されるという。

私は、もしそうだとすれば、自分自身の意識を還元する本体として、いわば意識についての意識を司る第三のより高次の意識の存在を仮定しなければならないのではないかと思う。

すると、Husserl の主張するように、たとえ意識の二重構造に関する知識が先験的であるということが容認できたとしても、第三の上位領域がこの意識構造の中でどんな位置付けになるかについては、経験的に説明してもらうまでは、われわれは納得できないのが本当ではないかと思う。

しかし、これは哲学領域の問題であるので、これ以上深入りしないで、次に移ることにする。

(2) 主観の範囲

現象学が対象とする主観(意識)の範囲は、心だけではなくて心身であると、Husserl は次のように述べている(本書 1章 3節)

「また各人における自己体験、またはこれを一般化した特異的自己所有感というものは身体と関連する。ある時は直接的な体験や直観により、ある時は間接的な経験や類推により、身体の中に経験が局在していることは誰でも知っている通りである。

この局在するという事は、全く独特なものであって、物体の中に感覚的に知覚されたり、物理学的に決定されるような部分や要素が局在することとは全く別ものである」。

このように、現象学では身体は自我にとって客観であると同時に主観であるということになる。それは私にも分かるが、もし現象学が医学や看護学の領域に入ってくるのなら、科学の立場から尋ねたいことがある。

身体と言ってもいろいろある。例えば生命のない毛髪や爪は、単なる「延長されたもの」すなわち客観ではないのか。Husserl の言う身体とは、われわれが神経系統と呼ぶものだけを指しているのではないのか。もしそうだとすると、痛みを感じる幻肢の局在する身体以外の空間もやはり主観に包含されることになるのか。しかし、このような愚問は現象学者には興味がないだろうから、これ以上続けるのは止めよう。

その代り、私にとって最も関心のある問題すなわち相互主観性(または間主観性)(Intersubjektivität)について、次章で詳しく論じてみたい。これは現象学と社会学の接点であるから、医学や看護学の立場からは、ゆるがせにできない問題である。

VI. 相互主観性

(1) 独我論(Solipsismus)

先ずこの言葉について説明しよう。「私だけが在る」をラテン語では Solus ipse という。これを合成して作った言葉が Solipsismus である。これを「独我論」と訳すが、私は「唯我独存論」とした方が分かり易いと

思うが、さてどんなものだろうか (本書 3章18節)。

閑話休題、現象学では全ての客観をカッコに入れるというが、そうすると自己の主観一つだけしか残らなくなり、独我論となる。

当然これでは困るので、いったんカッコに入れたものの中からその一部、すなわち他者の主観を取り出す。この操作によって、地球上の全人口に相当する数の主観が現われ、これらが現象学の研究対象となってくれる。

(2) 普遍性

Husserl が独我論を回避しようとするのは、言うまでもなく、現象学に普遍性をもたせるためであって、それには次の仮定が必要となる (本書 1章5節)。

「理想的に正常な条件下では、二人の人がいて相互に場所を変えるならば、あるいは変えたと考えるならば、そして二人ともある理想的な身体的正常状態にあるとするならば、最初の人の意識の中で実現したのと同じ現象を次の人がその意識の中で見る、という理想的なことが起こる可能性がある」。

Kant は時間と空間を越えて妥当性を保つことを普遍性の条件としたが、Husserl は時間条件を捨て、空間条件すなわち意識間の同質性だけを要求したことになる。

しかしながら、私は上記の仮定には次の二点において不同意である。

第一点は、意識間の同質性に関する仮定そのものである。科学者は意識間に個体差のあり得ることを前提とする。性格、文化などによって主観は個性化されているという前提に立つわれわれは、科学の場に立つ限り、この同質性に関する Husserl の仮定を根本的に拒絶する。

第二点は「理想的な正常状態」という条件である。このような状態は理想的には想定できるが、現実には存在しない。

医学に携わる者は、「正常」という概念に関する限り、哲学者よりもはるかに厳密に考えている。正常 (Normalität) と異常 (Abnormalität) との間には準正常 (Subnormalität) があり、その度数分布は普通、正規分布曲線にみるように連続である。この連続曲線の上に「理想的な正常状態」というようなものをどうやって定義しようというのか。そもそも「正常」とはある価値基準の存在を前提にして決定されるが、現実の価値大系は多次元であって一義的には決められない。これも現象学が科学になじまない点の一つである。

(3) 感情移入のこと

現象学では重要な概念として「感情移入」があるが、

これは *Einfühlung* の訳語である。

ところで、旧病院食堂で一語に食事をしていた時、土居健郎教授はこの訳語は適切でなく、むしろ「察すること」と訳した方がよいと教えて下さった。この語の動詞形 *einfühlen* は、ドイツでは日常的に使われる言葉であるが、ドイツ語以外にはこれに相当する単語がないので、われわれ日本人を含めて外国人には理解し難い用語だそうである。そのため、Husserl の弟子の女哲学者 Edith Stein はこの *Einfühlung* という用語をテーマに長編の博士論文を書いたという。この特殊な用語は現象学において、それ程重要であると同時に難解なのである。

日本ではこれに「感情移入」という不適切な訳語を付けてしまったために、これが独り歩きをして、本来の *Einfühlung* の概念が歪曲された形で日本国内をまかり通っているのではないかと心配である。

(4) Pola Negri の歌

この問題に関連して、古い話であるが、ある歌の一節を思い出した。

今から50年前は私の青春時代であったが、その頃ドイツに有名な映画女優がいた。その名を Pola Negri という。ある映画の中で特有の魅力的な低音でマズルカを踊りながら彼女の歌った歌に次の一節があった。

Ich spür' in dir,
Ich fühle' in mir,
das gleiche wilde Blut.

これを訳すと次のようになる。

私はあなたの中に spüren する、
私はわたしの中に感ずる、
同じ野性的な血潮を。

この spüren という動詞の名詞形は Spur で、スキーをやる人ならシュプールと言えはすぐお分りになる。滑った時に雪上に残るスキーの跡のことである。一般に Spur とは「跡」という意味であり、これが spüren という動詞になると「跡をつける」である。犬が鋭敏な嗅覚を使って主人や狐の通った足跡を付けていくことである。これが訛って spüren になると「嗅ぎつける」、「感じとる」という意味になる。

私はこの spüren は *einfühlen* に置き換えられるのではないかと思う。若い男女が相手の中に自分と同じ野生的な血潮が流れているのを「感じとる」時、そこに恋愛が成立するわけであるが、これと同じようにある自我がある他者に *einfühlen* した時に現象学が成立する。

しかし、いつもそうとは限らない。相手に熱い血潮の流れを感じとって、それが間違いであれば失恋の悲劇が起こるが、同じように誤った *Einfühlung* をす

れば、現象学研究も失敗することになるであろう。

(5) 人間と動物

現象学では相互主観性は人間の間だけに限られるが、実験心理学などの科学分野でも、日常経験の中でも、これは人間と動物との間に拡大できるように思う。

私の家では猫11匹と犬1匹を飼っていて、毎日彼らと顔を合わせて生活しているので、一種の相互主観性が成立しているように私は思っている。例えば、私が犬の悪口を言うと、家内は「そんな大声を出すとアーサー（犬の名）に聞こえて気を悪くしますよ」と注意する。

東京渋谷のJR駅前には忠犬ハチ公の碑がある。それは、多くの人があの犬に *einfühlen* した結果、多額の寄付金が集ってあの碑が建ったのである。

私は若い頃、つつが虫病の疫学研究に従事し、10年間ばかり全国を股にかけて野鼠を捕って回ったことがある。その頃、仲間同志では自分たちのことを捕鼠師と称した。

ある時、捕鼠師の間で捕鼠率を競ってコンクールをやったことがあったが、私がみごと第1位となった。その頃、一人の米軍衛生兵と鼠取り競争をしたことがある。長い間韓国で出血熱の研究に従事していたこの兵士は、米国第一の捕鼠師を自称していた。

ところで、私はこの米兵と勝負して勝ち、これで世界一になれたと鼻を高くしたことがあった。ただし、この時仕掛けたわなの餌は、私はいつものように甘藷を用いたが、この米兵はピーナツバターを使った。相手は日本の野鼠だからバターよりも藪を好んだのかも知れない。だから、私の世界記録が公認されるためには、米国に渡って米国の野鼠を相手にもう一度勝負をしなければ不公平ということになるが、その希望はとうとう果たせなかった。

前置きが長くなったが、私の捕鼠技術に感歎した人たちは、時々「どんなコツがあるのですか」と尋ねることがあった。その時私は、得意になってこう答えたものである。「ネズミの身になって、わなを置く場所を考えることですよ」。これをドイツ語に翻訳すると「ネズミに *einfühlen* することです」となる。

Husserl は *Einfühlung* について次のように述べている（本書 6章38節）。

「*einfühlen* する自我は、他の自我の精神生活（*Seelenleben*）、もっと正確に言えば、その意識を経験する」。

鼠取りをやっていた頃の私も、他の自我であるネズミの精神生活を体験しようと努めていたつもりである。

VII. おわりに

そもそも現象学は、主観—客観図式における客観をカッコ入れし、主観すなわち意識とか認識の問題だけに取り組むのであるから、もともと、科学畠では心理学と近縁の関係にあることは言うまでもない。

ところが最近、これまで無関係だった社会学や看護学の分野に現象学が進出してきた。それはいったい、なぜであるのか。

私の予想では、社会学にせよ看護学にせよ、現象学を受け入れた科学分野は、心理学を除いて、何か共通の特徴があるはずだと思ったので、それを探すことにした。

(1) 現象学に対する寛容

どの分野でも、科学としての発達パターンには一定の規則がある。最初は帰納的アプローチから始まり、その分野の全貌がだんだん明らかになってきた発達段階で、マラソン競走の折り返しのように、反転して演繹的アプローチに走る科学者が出現し、少しずつその数を増してくる。つまり、全体として見ると、発達の方向が帰納的から演繹的へと緩やかに変化していくのである。

これを人間にたとえれば、帰納的発達は身体的発育、演繹的発達は性的発育とみることができよう。

例えば、19世紀末まで帰納的に進歩してきた物理学は、20世紀に入ると Planck らによる量子力学が出現し、これを契機に演繹的逆流が始まり、この1世紀を通じて少しずつその勢力を伸ばしながら21世紀に入ろうとしている。いわば物理学の発達段階は今や壮年期にあると言えよう。

人間には新生児期、乳児期、幼児期、学童期、思春期、青年期などの発育段階がある。

科学の発達も分野によって早い遅いの違いがあるが、いずれにしても、このような規定の順序を経て進んでいく限り、それは正常な発達過程を踏んでいると言える。

ところが、科学の発達において、帰納的アプローチが十分な成果を挙げていないにもかかわらず、早熟的に演繹的アプローチが頭をもたげてくることがあるとすれば、それは幼児期に二次性徴が現われてくるのと同じで、異常な発達過程と見なければならぬ。

私は、このような異常な発達過程の下にある科学分野が現象学に対して寛容であり、その進出を容認する体質があるのではないかと思う。

(2) 現象学の導入

私の知る限りでは、現在、Husserl の呼びかけに応じ

て現象学を方法論的用具として受け入れようとしているのは、社会学と看護学である。

そこで私は、この二つの分野は、これまで上記の異常な発達過程を経過したという共通点をもつことを指摘したい。

社会学では、発達初期の段階で不世出の巨峰 Max-Weber や Durkheim が輩出し、その後の学問の進歩の方向に決定的な影響を与えた。

そのため、後に続く社会学研究者の多くは、この大家たちの張った網の中にとじこめられ、その学説を基盤にして演繹的に研究を展開するという手法に頼らざるを得なくなり、この神話化した学説を打破できないまま今日に至ったように思える。私は、これが社会学の発展を妨げている根本的な原因だと見る。

そこで、一部の社会学者たちは、この偉大な先輩たちの呪詛から逃れるために、現象学にすがったに違いない。

一方、看護学もこれと似たような状況にあって、いまだに創始者 Nightingale の影響から完全に抜け出すことができずにいる。このような歴史的背景の中で看護界を支配したのが英雄待望論で、そのムードの中で第二の Nightingale になろうとして、多くの看護学者がいろんな看護モデルや看護理論をこれまで提唱してきた。

しかし、この雨後の竹の子のように輩出した学者たちは、どれをみてもどんぐりの背くらべで、Nightingale はおろか、Max-Weber や Durkheim にも及ばない人たちがばかりである。でも、それにもかかわらず、これらのモデルや理論は、後進の看護学研究者を束縛し続けている。

したがって、社会学の場合と同様、一部の研究者が現象論に活路を求めようとしている。その気持は私にもよく分かる。

(3) properdin 事件

ここで話題を変えて、医学の分野で私が見聞した一つの事件をご紹介します。

今日ではもう憶えている人は少なくなったが、20年ほど前に properdin 事件というのが起こった。

そもそも血清が殺菌力をもつことは、前世紀末から知られていたことであるが、この本態は2種類に区別されていた。

一つは抗体であるが、その本態は明らかで、化学的には γ -globulin である。その作用の特徴は特異的という点にある。

もう一つの成分は非特異的（普遍的）であることを特徴とするが、その本態は長く不明のままだった。

ところが、ある米国の科学者がその本態をつきとめ、

その分離に成功した。この物質は properdin と名付けられ、世界中の医学界から注目を浴び、たくさんの科学者がこの研究分野に走った。

言うまでもなく、これは大発見だからである。考えてもいただきたい。今日エイズの病原体として問題になっている HIV ウィルスは、宿主に抗体を作らせないから、治療も予防もできず、お手あげなのである。

ところが、この properdin の作用は非特異的であるから、抗体産生能などは問題ではなく、HIV ウィルスを含めてあらゆる病原体に対して一様に殺菌的に働くはずである。だからエイズの治療問題なんかも、これで一挙に解決されることになる。

ところが、この properdin を発見した科学者は、ある日突然自殺してしまった。その理由は、これまで発表したすばらしい研究結果は全部でっちあげであったが、この時、とうとうそれを隠しおおせられなくなったからである。なおその当時、日本でも尻馬に乗って properdin 研究をやった人は少なくなかったが、その人たちはとんだ災難にあったものである。

(4) 科学における詐欺、売名および流行

最近米国で「科学研究における詐欺」というショッキングな本が出版されたそうである。それは properdin 事件のような詐欺が珍しくなくなってきたからである。中でも詐欺の多い科学分野は医学関係だということ。

これは、米国では制度上、科学者の間に過当競争を起こしていることが原因である。

さすがに日本ではこれ程ひどくはないと思うが、しかし、皆無というわけにはいかないであろう。

というのは、この種の詐欺の一手手前の売名行為が最近日本でも盛んになってきたからである。あるマスコミの方から聞いたところによると、学会前になると自分の発表する研究のマスコミに対する売り込み合戦が、ますます激しさを増してきたそうである。

そもそも科学の進歩というものは緩やかであって、こつこつ地味な研究を続けるのが研究者の本来の義務である。ところが、研究者の中には、流行歌手のように名声を得るがために研究するという不心得者が出てくる。世間の注目を浴びるためには、何か奇抜なことを言い出すのが一番である。そして、もし誰かがこの冒険に成功すれば、直ちにその後を追っかける人がたくさん出てくる。

第三に、売名とは違いますが、これに関連した現象が科学における流行である。

私は半世紀にわたる研究生生活の中で、衛生学という狭い分野だけにはあるが、流行というものすなわち学問の浮き沈みの激しさを体験してきた。これはどの分

野でも同じだと思うので、ちょっと紹介したい。

敗戦直後、衛生学界に入って初めての私の体験した流行は「かび」の研究だった。Penicillin, Streptomycin に続く強力な抗生剤を発見しようというのである。その次は、四日市ぜんそく、水俣病に触発された公害研究ブームだった。これに続いてポリオ流行を契機に始まったワクチン研究、原子力平和利用に伴って始まった放射線健康管理研究、それからがん、難病、老人保健などの研究が興って今日に至っている。この流行波は目まぐるしく変り、一つの流行の平均余命は10年から20年である。

それまで徐々に発達してきたある科学分野が、ある時突然、急速に飛躍するのが科学における流行であるから、これ自身は良いものと言える。ただ問題はその寿命の短いことである。私はつねづね学生に対しては「流行は追うな。流行を作れ」と言ってきた。

哲学と科学をドッキングさせようというのも、要するに一つの流行に過ぎない。最近哲学は余り振わないが、その中で現在比較的人気のあるのが Kierkegaard の実存主義と Husserl の現象学である。そこに眼を付けて、一部の神学者は神学に実存主義を取り入れ、一部の科学者は科学に現象学を導入しようとしているのである。

これらは新しい試みであり、みんなの注目を浴びることは請合いである。しかし、それが成功するという保証はどこにもない。

特に哲学は存在や時間の本質を論ずるが、科学はそこを素通りして存在や時間という土台の上に理論を構築する。したがって両者は、これまで完全な棲み分けを行なってきたと言える。それが今になって、両者をドッキングさせようというのは元来無謀な試みではないのか。

勿論、人生どこでも常にそうであるように、科学者とても石橋をたたいて渡ることばかりやっていたのでは発展は望めない。時にはリスクを承知で冒険に踏みきらなければならない。ただし、そのためには十分な覚悟が必要である。

看護学において、あえて危険を冒してでも現象学でやって行きたいという研究者がいれば、私は決して反対はしない。ただ、十分な覚悟をもって研究者としての人生の方針決定をしてほしいだけである。いたずらに流行を追えば、早かれ晩かれ、必ず流行遅れになる。その時自分の軽率さを悔いても、どうすることもできない。

(受理日：1992年10月13日)